

## 日本語コミュニケーション能力向上のための授業実践と評価

「日本語コミュニケーション演習」 周辺

樫内 久義 久保田 英助\* 阪 美里\*

愛知みずほ大学瑞穂高等学校 \*愛知みずほ大学人間科学部心身健康科学

Hisayoshi Kashiuchi・Eisuka Kubota\*・Misato Ban\*

Mizuho Senior High School, \*Department of Human Sciences, Aichi Mizuho College

愛知みずほ大学では、初年次において「日本語コミュニケーション演習」を必修科目として開講している。その目指すところは、名称が示すとおり、日本語を用いたコミュニケーション能力の育成である。現在、ほとんどの大学が初年次教育を実施しているが、そこでは、主に文章の書き方を中心に日本語能力の育成に関する授業が行われている\*1。これは、新入生の日本語に関する能力が大学の期待を満たしていないことを物語る。学生の日本語能力の向上は大学における「学び」の充実に不可欠であり、それは、大学における「課題」として位置づけられる。本稿では、本学において、その「課題」に取り組むべく基幹科目として開設した「日本語コミュニケーション演習」の特徴と課題、そして、目指すべき方向性について紹介し、併せて、日本語能力を核とする基礎学力の育成をめぐる大学教育に対しての一考を試みる。なお、本稿は主に樫内によるが、ともに当科目を担当する久保田、阪の考察を一部加え、共著とする。両名の担当箇所については、各末尾の記名にて示す。

### はじめに

「日本語コミュニケーション演習」は平成27年度で開設3年目を迎える。本科目は、教務とは別に、導入1年前の平成24年8月に作られた研究会において、その中身が検討された。研究会発足当初は、学生のレポートや論文を書く力を向上させるための授業として「文章表現」という仮称が与えられた科目であり、研究会の名称も「文章表現研究会」なるものであった。しかし、高大接続の視点および初年次教育の視点から、研究会の回を重ねるうちに文章を「書く」力だけではなく、社会のグローバル化を背景として、これから求められる新しい学力の核となる「主体性」や「協働性」の育成を含めた汎用的能力の向上もが、その目的に加えられた。そこで、新しい科目には、「主体性」、「協働性」を育てるのに最善であると考えられるアクティブ・ラーニングが導入することになった。

アクティブ・ラーニングは、本来の目的でもある「書く」力の向上にも望ましい学修スタイルであると考えられた。研究会のメンバーは、3名であったが、そこには大学教員以外に系列の高等学校の国語科教員が1名含まれていた。その教員は30年近く高

等学校の国語教育に携わっており、その短くはない国語教育の経験から、文章を「書く」ためには、まず、「考える」、すなわち、自ら課題を発見し、自身の意見を持つことが不可欠であることが実体験により確認されていたからだ。

以上の経緯により当初の目的から形を変えつつ検討されてきた新科目は、後で述べることになるカリキュラム上の位置づけからの要請もあり、「書く」だけにとどまらず、グループワークでの協働性や、課題発見のために必要な調査および分析に関する力等に加え、「話す」、「聞く」、「読む」を含めた総合的なコミュニケーション能力の向上を目指すこととなった。そして、現在の「日本語コミュニケーション演習」が誕生したのであった。ただ、本科目は、まだ開設されてからの年数も浅く、その内容についても、実施される都度、検討され、形を変えつつある。

本稿では、2年間にわたる授業実践を振り返りつつ、冒頭で紹介した事柄について考えていきたい。まずは、「日本語コミュニケーション演習」が生まれた大学教育をめぐる環境について述べ、その後で、当科目の特徴と具体的授業内容の紹介と検証を行う。そして、さらに、当科目の開設および研究会発足以

前の日本語リテラシー向上に関する本学の取り組みを紹介し、最後に当科目の学術的意義について述べることにする。

### 困り込まれた世界

ポータブル情報機器の普及の目覚ましきは日常の風景が如実に物語っている。地下鉄、路上、大学の教室等で目にする景色の共通アイテムはスマートフォンをはじめとするポータブル情報機器である。その光景からは「依存」という言葉さえ浮かぶ。

実際、ネット依存に関する総務省の調査（「高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査」<sup>\*2)</sup>によると高校生が一日のうちスマートフォンやフィーチャーフォンのネットを利用する時間は、平均 161.9 分であった。ちなみに、これは大学生の授業以外の学習時間の一日平均 39 分<sup>\*3)</sup>の 4 倍以上にあたる数値である。その一日のネット利用時間のうち、LINE、Facebook、Twitter 等の SNS 利用に関する時間は 100.8 分で、全体の 6 割以上を占める。その時間の多さと大学生の授業以外での学習時間の少なさを嘆かざるをえないが、ここで注目すべきは、誰と関わるための時間かという点である。

先の総務省の調査では、SNS の利用目的として最も高い割合を示しているのが、「友だちや知り合いとコミュニケーションをとるため」であり、それは 71.8%にも及んだ（複数回答）。つまり、SNS で「つながる」相手は、主に学校などで日常顔を合わせる「仲間」なのである。

ユビキタスの視点は時空を超えた広がりに向けられず、手の届く、声の届く範囲に向けられている。この範囲の狭さは、また、ある集団の発生をも促し、それは、ときに排他的人間関係を生み出す集団ともなり得る。

ネットを中心に形成されるいわゆるネット社会では、独自の表現方法が生まれた。それは主に日本語変換機能が基になったものである。パソコン入力において、日本語の文字、すなわち、「ひらがな」、「カタカナ」、「漢字」は、アルファベットやアルファベット以外の外国語文字、および一般記号と同等に扱われる。その性質を利用した「文字」の代表が顔文字、絵文字である。それは、文字だけでは相手に伝えられない感情や気分を表現するだけでなく、相手との関係を穏やかで緩やかなものに留める緩衝材の役割を果たしもある。顔と顔をつき合わせた直接的コミュニケーションでなら、表情および身振り手振り等で補われる「言葉」の限界を、顔文字や絵文字は代替する役割を担う。この顔文字や絵文字のほ

かに、インターネット・スラングとして「掲示板言葉」、「ギャル文字」などと呼ばれる「言葉」や「文字」が挙げられる。これらの表現では、日本語変換機能を利用する者なら誰しも苦笑した覚えのある誤変換すら、メタ・コミュニケーションとして「立派に」機能している。いまや、これらの「言葉」の一部は、「日本語」の文化圏を越え、海外においても若者を中心とするネットユーザーに拡散され、親しまれてきている。パソコンの特性と日本語変換機能が生み出し、ネット環境が育てた新しいコミュニケーションツールは、その意味を解し得る「仲間」たちだけが利用可能な「言語」、いわば、ジャーゴンとして機能している。ジャーゴンは、それを使用する仲間たちの証としての意味合いも有し、使用する者同士のつながりを強めるが、その一方で、使用する仲間以外との関係を隔てる働きを有する。ネット世界に入り込めない者は、彼らの仲間となることはできない。なぜなら、「言葉」が理解できないストレンジジャーなのだから。

この性質は何もインターネット・スラングに限らない。元来、LINE や Facebook を代表とする SNS で結ばれる関係も、グループを単位とするつながりであり、グループ以外の者とは隔絶される。実際、グループからの疎外を恐れ、片時もスマートフォンやフィーチャーフォンを手放せない若者をめぐる状況が問題視される。本来、時空を超えてつながりあえるという、コミュニケーションのユビキタスを促すはずのインターネット環境が、皮肉なことにコミュニケーションの範囲を狭めているのである。この収束的コミュニケーションの問題は、若者の語彙、読解力を中心とする語学力およびコミュニケーション能力不足の助長をももたらす。なぜなら、ジャーゴンでやりとりされる関係においては、限られた範囲で限られた仲間だけで通じ合えば済むのだから。

言葉で伝えきれない思いを補うべき表情、身振り手振りの代用としての記号の種類を増やし、その意味を覚えていく労は、会話や文章において時と場合に応じて適切に使える語彙、読解力、表現力を養う労に劣るとは思われないが、後者に使用される労は敬遠されるか、養う機会が十分に与えられない。

メタ・コミュニケーションとしてのインターネット・スラングの多様化と増加は、ネットユーザーの日本語能力の低下を助長する。メタ・コミュニケーションは、本来、コミュニケーション不調を改善するために用いる、通常のコミュニケーションを補うための手段である。だが、通常、すなわち、正規の日本語を用いる代わりに「顔文字」や「絵文字」等

の様々なインターネット・スラングを用いる傾向は、日本語に関する語彙力の低下を助長する。コミュニケーション不調を正規の日本語を用いて工夫する労から遠ざけるからである。そのため、語彙力は乏しくなり、時と場所に応じた言葉の使い分け、言い換えができなくなり、コミュニケーション能力にとどまらず、思考力、表現力の低下、さらには日本文化の貧弱化を招く。本末転倒の感が否めないが、いまや、「絵文字」、「顔文字」の代わりに使える「日本語」を学生に身に着けさせるための日本語教育に努めなければならない一面を呈するほど憂慮すべき状況にあるともいえる。

### 高等教育の現場で

昨今、国内のほとんどの大学で日本語のロジカルライティングスキルの向上を目的とした科目がカリキュラムに見られる。それらは各大学において初年次に組み込まれている場合がほとんどである。それは、文章を書く力が大学での学びに必要な不可欠であることを意味するだけでなく、新入生に、その能力の欠如が著しいことを物語っている。2008年に設立された初年次教育学会では、年に1回開かれる大会において、学生の文章作成に関する研究発表が取り上げられないことがない。また、文部科学省が平成24年度に調査した初年次教育の取り組み状況においても文章に関する能力（「レポート・論文の書き方等の文章作法」）の向上を目指す大学の割合は調査対象全体の88%にも上った<sup>\*4</sup>。この文章作成能力の育成は、「プレゼンテーション等の口頭発表の技法」（同調査結果79%）、「学問や大学教育全般に対する動機付け」（同76%）、一般的にキャリア教育と呼ばれる「将来の職業生活や進路選択に対する動機付け」（同77%）の中で最も高い割合を示している。ちなみに、同調査によると初年次教育を実施している大学は94%の大学にも上る。いまや、初年次教育が大学において重要な位置を占めており、その中でも文章作成能力育成の必要性がいかに高いものであるかがわかれる。また、現在、大学入試、すなわち、大学入学選抜の見直しを中心に高大接続の問題が行政、教育、企業を含む各機関で検討されているが、グローバル化に伴う日本の行く末に対する危機感が背中を押すのか、高大接続の問題に関する議論は熱を帯びている。平成26年年9月に開催されたシンポジウムの中で日本学術振興会の安西祐一郎氏は多極化する世界を背景に、これからの時代を「不確実な時代」とし、その中で求められる学力像についての提言を行った<sup>\*5</sup>。その提言の中で大学教育では『多様な学生が主体的に、協働しつつ学ぶことので

きる高度な学びの場』の創造」を担うべきとし、「主体性」・「多様性」・「協働性」をキーワードに挙げている。

このような大学を含めた高等教育の現状と先に眺めたネット社会における若者のコミュニケーションの実態を考えると、「日本語コミュニケーション演習」の役割は、そのミッションが実践されるとき、決して小さくはない。では、次に「日本語コミュニケーション演習」の実像を紹介していく。

### 「日本語コミュニケーション演習」の特徴

研究会は「日本語コミュニケーション演習」を開設するにあたり、3つの目的を掲げ、さらに、7つの項目を「目標」として挙げた。それらは、当科目が初年次に配置されることと、アクティブ・ラーニングを意識して設定され、そこから具体的な授業計画が作成された。目的と目標は以下のとおりである。

#### 目的

- ①大学での学びをより豊かなものにするために日本語を用いたコミュニケーション能力を育成する。
- ②学びの世界を探索するために必要な言葉の力に気づき、その力を伸ばす。
- ③借り物でない自分自身の言葉によって新しい世界を広げていく。

#### 目標

- ①コミュニケーションの重要性を認識する。
- ②コミュニケーション能力を高める。
- ③日本語への関心を高める。
- ④日本語に関する知識を深める。
- ⑤情報の収集・発信の方法について学ぶ。
- ⑥情報機器の効果的利用方法について学ぶ。
- ⑦プレゼンテーションについて学ぶ。

これらの目的や目標は、特に目新しいものではなく、むしろ初年次教育に「ありがち」なものである。その設定には、科目開設前年度の8月に作られた研究会における検討期間の限界および、研究会発足当時には、文章力に特化した授業として検討を始め、途中から「舵」をアクティブ・ラーニングに切ることになったという要因が大きく、手探り状態のまま「出帆」した感は否めない。

その目指すところの評価は別として、研究会は次に具体的な授業内容の検討に入った。そこで最も意識したことは、学生たちに自信を持たせることだった。裏を返せば、教員が本学の学生たちに自信を持たせたいと望んでいたことを語っているのだが、予測のつかないこれからの「不確実な時代」（安西）の大海において彼らが難破しないためには、まず「学び」において、最も大きな動機となる自己肯定感を

持たせたいと考えたのだ。いまの子どもたちが社会に出たときに、その多くが現在存在していない新しい職業に就く可能性が高い<sup>\*6</sup>とも指摘されるこれからの予測のつかない変化の激しい時代の波を乗り切るための汎用的能力を身につけていくためにも、学びの原動力となる自己肯定感に着目し、「学生たちに自信を持たせる」ことを研究会メンバーの「合言葉」とした。

授業での学びを学生たちの自信につなげるために我々は、到達目標の「ハードル」を高くしすぎないことを心がけた。そして、すべての授業を終えた後、自らの学びの軌跡（足跡）が確認できるよう、努力の可視化を試みた。それがポートフォリオを作成させることだった。そして、授業を履修する学生全員に授業専用のファイルを用意し、そこに授業で配布した資料、自らが提出した課題等をすべて綴じさせることとした。

「自信を持たせる」ことの次に意識したことは、「飽きさせない」ことだった。飽きさせない、つまり、授業内容に興味を抱かせるために、学生たちに少しでも魅力のある教材やテーマを与えることを考えた。そのために、「日本語コミュニケーション演習」という名称からは容易に想像のつかないような構成となった。次に、その具体的な内容を検証を加えながら紹介するが、紙面の都合上、授業を実践した2年間に共通し、本学独自の取り組みと考えられる3つの教材について紹介する。

#### 「大学紹介・ミニコミ誌」

まず、はじめに、授業の概要について紹介しておく。2年間実施してきた「日本語コミュニケーション演習」の全体構成は以下のとおりである。

平成 25 年度前期 15 コマ 2 単位 必修

「日本語コミュニケーション演習（読む+聞く）」

第Ⅰ部 コミュニケーションゲーム

第Ⅱ部 大学紹介

第Ⅲ部 類義語比較

平成 25 年度後期 15 コマ 2 単位 必修

「日本語コミュニケーション演習（話す+書く）」

第Ⅰ部 アナウンス

第Ⅱ部 キャンパスライフの充実化

第Ⅲ部 意見文

平成 26 年度前期 15 コマ 2 単位 必修

「日本語コミュニケーション演習（読む+聞く）」

第Ⅰ部 コミュニケーションゲーム

第Ⅱ部 ミニコミ誌

#### 第Ⅲ部 類義語比較

平成 26 年度後期 15 コマ 2 単位 必修

「日本語コミュニケーション演習（話す+書く）」

第Ⅰ部 アナウンス

第Ⅱ部 大学祭企画

第Ⅲ部 意見文

25 年度、26 年度とも前・後期には、それぞれ、「読む+聞く」・「話す+書く」の「副題」が添えられ、それらを意識しながら展開するよう心がけた。また、前期の第Ⅰ部をゲーム等を通じて学生たちにコミュニケーションに関して興味を持たせる導入の位置づけた。

それでは次に、基幹に据えた授業内容について紹介する。ここでは前期第Ⅱ部として実施した「大学紹介」と「ミニコミ誌」について眺めていく。

この單元では、グループワークを体験させること、創造性を発揮させることのほかに、調査や取材を通して「読む」ことや「聞く」ことの重要性に気づかせることが主なる目的であったが、自分たちが通う大学および地域に関心と愛着を持ってもらうという意図もあった。そして、それは、学生自らが直接足を運んだり、取材したりすることが可能である「触れられる」範囲を対象としており、学生たちにとって、決して「ハードル」が高くなく、取り組みやすい課題であると考えた上でのテーマ選定でもあった。

また、「大学紹介」では発表時にスライドを使用することとした。それは、ICTの知識、技能の習得も（ある程度であるが）目指したからである。対して、「ミニコミ誌」に関しては、パソコンを使用しても、手書きでも作成方法や表現は自由とした。これは、オリジナリティーを発揮させたいという意図と、前年度の「大学紹介」において、情報機器に不慣れな学生が少なくなく、一部の学生に負担増が見られたからでもある。

基本的に「日本語コミュニケーション演習」では教員はファシリテーターとして関わることにしていたこともあり、この單元では、大半を学生たちの自主性に任せた。授業の初めと終わりだけ教室に集め、その時間に取り組むべき課題の確認と、事後の振り返りをさせるほかは、場所は限定しなかった。配当時間は「大学紹介」も「ミニコミ誌」も5時間程度であったため、授業時間内で作品を完成させ、発表の練習等を行うことは難しく、ほとんどのグループが授業時間外に集まらなければならなかった。ただ、自主性に任せると表現すると「聞こえはいい」が、「賭け」でもあった。

グループのメンバー構成は、教員によってなされ

た。積極的な関係作りを試みなければ円滑な作業が難しい環境にあえて学生たちを置いた。この学修活動自体がコミュニケーション能力を向上させることも念頭においての構成であったが、当然、そこにはリスクも潜んでいた。リーダー存在の有無をはじめ、メンバー同士の能力や個性の差によりグループ間で差が出ることは容易に想像できた。しかし、教員は、各学生に毎授業後提出させる作業記録（感想を含んだ「振り返り」）や学内で作業が行われる場合は（教室、サロン、図書館、パソコン教室等、ほとんどのグループは学内施設を利用した）巡視等で得られた情報をもとにアドバイスをする程度の関わりにとどめた。

したがって、どの程度の内容の発表や作品になるか把握し難い「賭け」であった。そして、結果は、予想通り、グループによって差の大きいものとなった。

教員が最も懸念したのは作業等を他のメンバーに任せてしまう「フリーライダー」の存在だった。それを避けるために「振り返り」において授業ごとに自らが関わった作業を報告させたり、発表時には必ず全員に発言させ、その場で感想を言わせるように仕向けたりしたもの、その存在を無くすには至らず、グループによっては皆無ではなかった。発表後、総括としてまとめさせたレポートにおいて、協働作業に関して振り返らせたが、そこで各人の取り組み姿勢に少なからぬ差があったことが把握された。ただ、積極的に取り組まなかった学生は結局、毎回課した「振り返り」や発表後提出させた最終レポートにおいても相応の内容にしかとどまらず、その姿勢を露呈する結果となり、評価に関しては公平に保つことができたと考える。

では、肝心の発表または作品はどうであったかという、正直、期待していたレベルに達するグループは少なかった。それには様々な理由が考えられるが、グループワークおよびアクティブ・ラーニングに不慣れな学生に対しての教員の「立ち位置」（ファシリテーターとしての関わり方）が起因する部分が少なくないと考えられる。学生の自主性に重きを置きながらも、より積極的なアプローチを試みる授業展開が課題として残った。

### 「類義語比較」

この單元では、日常使っている言葉の微妙なニュアンスと、その用途について調べ、日本語に対する関心を高めることを第一の目標とした。

言葉の「微妙なニュアンス」に気づかせるために比較する言葉として類義語を選んだ。例えば、「上が

る（あがる）」と「上る（のぼる）」について考えてみると、「階段を上がる」は「階段を上る」と言い換えることが可能であるが、「座敷に上がる」とは言えても「座敷に上る」とは言わない。このように「似て非なる」言葉を比較することは、その用途だけではなく、成り立ち等を含めた多角的な分析が必要になり、言葉に対する関心を高めるとともに大学で求められる物事を深く追究する姿勢が養われると考えた。

学修スタイルとしては、ここでもグループ学修が相応しいと考え、導入した。そして、発表においては、スライドを使用することとした。

グループ学修のスタイルを取り入れた最大の理由は、複数による議論、検討を通じてテーマの類義語比較において多面的な比較・分析が可能となることであった。また、発表にスライドを使用することにしたのは、「大学紹介」と同様に ICT に関する知識、技能の習得を目指すという一面もあったが、語彙比較には視覚に訴える方法が適していると考えたからでもある。

学生たちに限らず、普段使っている言葉について、その意味と用途を詳しく調べる機会は多くはない。ましてや複数の語彙の意味、用法を比較すること自体、高校までの国語の授業でも行われることは稀であり、学生たちの戸惑いは容易に予測できた。しかし、それは学生たちにとって新鮮なテーマでもあり、その課題を通じて日本語への関心を高めてもらえる好機でもあった。

そこで、「学び」をより有意義なものにするために「戸惑い」の軽減を図った。最初の授業時に教員が作成したスライドを用いてデモンストレーションを行ったのである。さらに類義語選択にあたっては十分相談に乗り、アドバイスした。

各グループのテーマ（対象語彙）が決まってからは、「大学紹介」、「ミニコミ誌」同様に、教室を出て作業することを可とした。ただ、利用すべき施設として図書館を薦めた。また、語彙比較に適していると考えられる辞典類をはじめとする書籍を複数紹介し、さらに担当教員一名が図書館で相談にあたった。この單元においても教員はファシリテーターとして関わることを旨としたが、上述したとおりの難しさが伴い、「大学紹介」や「ミニコミ誌」のときよりも積極的に関わる度合いが高くなった。

さて、実際の作品と発表であるが、「大学紹介」と「ミニコミ誌」の授業を体験した後ということもあり、スライド作品においても発表においてもレベルの向上が見られた。これは、次に述べるフリーライダーの排除における工夫と、グループ分けを行うに

あたり加えた配慮が功を奏した部分も大きいと考える。

グループ分けは前回のグループ分けと同様に教員が行ったが、その際に、リーダーの役割を果たせる学生を必ず各グループに1名以上配した。そして、さらに作業を活性化させるために、前回のメンバーを全て入れ替えるのではなく、同じメンバーを数人配置することとした。

また、今回の授業においても懸念されたフリーライダーに関する対策として、前回のグループワークにおいて積極的に参加しなかった学生を同じグループには入れないこととした。前回のグループワークで見受けられたフリーライダー的存在の学生を分散させるためである。それは、たとえ、フリーライダーの存在を完全に無くすることはできなくとも、他のメンバーへの負担は軽減できると考えた工夫であった。そして、実際、「類義語比較」においては、明らかなフリーライダーの存在は認められなかった。

その意味も含めて、「類義語比較」の授業は、同じグループワークではあっても、「大学紹介」や「ミニコミ誌」に比べ、「手応え」のある内容となった。

### 「アナウンス」

「日本語コミュニケーション演習」は前・後期各2単位の必修科目として設定され、前期では「読む+聞く」、後期では「話す+書く」という「副題」が添えられた。そして、「話す」力の伸長を意識した後期に「アナウンス」は配置された。

アナウンスには15コマのうち少なくとも4コマの時間を充てた。それは、話すことがコミュニケーションにおいて最も重要であると考えたからである。話すことは、特別な媒体なしに意思疎通を可能とするコミュニケーションの基本であり、プレゼンテーションにおいても重要な手段である。プレゼンテーションという、一般的にPowerPointなどのスライドを用いた発表が思い浮かべられる。しかし、基本は話すことに他ならない。プレゼンテーションの第一人者とも言われるガー・レイノルズ氏は「シンプル・プレゼンテーション」を推奨するが<sup>\*7</sup>、どのような刺激的な映像や音響を添えたとしても肝心の話に魅力がなければ、効果的なプレゼンテーションとはならない。また、アナウンスの授業は学生たちに新鮮であり、彼らの興味をひくと考えた。

正しい発音や発声方法をはじめとするアナウンスの基本的技術を練習することは、アナウンサーを養成するような専門教育機関以外では、日常生活で経験することはまずない。さらに、声を出すトレーニングは運動でもある。身体を使うことにより、昂

揚感が生じ、授業への積極的取り組みが期待できると考えた。

ただ、アナウンスを取り入れた理由は、これだけにはとどまらない。さらに大きなメリットがあると考えた。それは「書く」力も鍛えられることだった。

アナウンス原稿を学生に作らせた。そして、そのテーマを学生自身の身近な話題とした。文字数は800字以内とした。この分量の設定にはNHKの「高校放送コンテスト」の1分10秒以上1分30秒以内（アナウンス部門）という規定を参考にした。長くても2分程度で読み切れる分量と考えたからである。

この作業は、文章力向上に効果的であると考えた。なぜなら、学生自身の身近な話題を800字程度にまとめる作業は、ある程度の難しさを伴うからである。800字という文字数は決して多いものではない。その点から見れば、学生たちにとって、「とっつきやすい」文章といえる。しかし、それは、無駄のない簡潔な文章が要求されているともいえる。

アナウンスの原稿は、簡潔でなければ聞き手に伝わりにくい。要点が曖昧では、聞き手は興味を持たず、「耳を傾け」ない。したがって、アナウンス原稿は明確な文章でなければならず、的確な表現と論理的な構成が求められる。そのため、学生は原稿の作成にあたり、相当の労力が課されることとなる。

文章、特に論理的な文章は第一に要点が明確で整然としていることが求められる。その点から、アナウンス原稿の作成は、論理的文章作成において「入門的」役割が果たせると考えた。

授業は、基本的な発声、アクセント、イントネーションなどの練習、さらに教員が用意した原稿の「読み」を経て、学生が自ら作成した原稿をクラスの学生に読み聞かせる発表で結ばれた。この授業の最後に行った発表では、学生同士、評価（審査）をさせた。発音、発声、アクセントなど基本的な「読み」に関する項目と原稿の内容、発表の姿勢などの項目を設けた審査用紙を使用してお互いのアナウンスを評価させた。「アナウンス」の授業の総合評価は、この審査結果と教員の評価（学生と同じ審査用紙を使用）、および、発表以外の各自の「振り返り」などを参考に行った。

「アナウンス」の授業は、家族や友人など親しい人以外の前で話す機会が少ないと思われる学生たちが、大勢の前で声を出し、話さなければならず、授業を始めるにあたっては、学生がどの程度の積極性をもって臨んでくれるか不安であった。しかし、実際、授業を終えてみると、学生たちは、期待以上に、しっかりと声を出し、最終の発表でも堂々とした「演技」を披露してくれた。最終発表の原稿も大半が高

く評価できる内容であった。それらの結果から、当単元の効果に手応えを感じたが、さらに派生した効果として、学生間の相互理解を深める役割を最後に挙げておきたい。

本学では県外出身の学生も少なくない。そのため、最終発表のアナウンスでは、出身地の紹介なども語られた。また、各自の趣味や特技、その他、「とっておき」の話題を通して、学生たちは、お互いを知り、理解を深めることとなった。実は、アナウンスの内容については、どこかから簡単に入手できる「コピー・アンド・ペースト」的に既成の話題や各メディアで一般的に発信されている情報を利用させないために学生自身の身近な話題としたが、意図しない形で学修内容を充実させることとなった。それは、アクティブ・ラーニングの効果について考える上においても示唆深い経験となった。

### 課題と展望

以上、「日本語コミュニケーション演習」において、その独自性が高いと思われる3つの単元内容の特徴および評価に関して述べてきたが、ここでは、「はじめに」および『日本語コミュニケーション演習』の特徴で紹介した科目の目標を踏まえての課題と今後の展望について述べたい。

当科目が目指した3つの目的と、それを満たすために掲げた7つの目標がただの「空箱」ではなく、実際に「中身」の詰まったものになっているのだろうか、まずは検証していく。

3つの「目的」は7つの「目標」を目安（基準）にしているために、それらの達成度が課題を炙り出すことにより課題を明らかにするが、その達成度を測る「目盛り」は、各授業後および最終授業時に学生に記入させた「振り返り」、教務が実施した授業アンケートと担当教員の実感による。

コミュニケーションに関する2つの目標である「コミュニケーションの重要性を認識する」・「コミュニケーション能力を高める」に関しては、度重なるグループワークを通じて効果があったと考える。「振り返り」では、グループワークに関する記述が多かった。その難しさや意義を含め、学生たちは相互のコミュニケーションの必要性を実感したようである。議論や作業を円滑に行うための試行錯誤が、「振り返り」の記述から伺えた。したがって、コミュニケーションに関する目標に関しては高い達成度が実現されたと考える。

次に日本語に関する2つの目標、「日本語への関心を高める」・「日本語に関する知識を深める」に関してだが、「類義語比較」および「アナウンス」にお

いて、その意味（語源・ニュアンス等）、音声（アクセント・イントネーション等）等、普段、意識しない日本語の特徴に注目させることができたと考える。

情報に関する目標では、「大学紹介」・「ミニコミ誌」における取材、プレゼンテーション、作品づくりを通じて、その「収集」と「発信」の重要性について認識させるとともに、その方法に関する知識の習得に成果があったと考える。また、残りの目標である「情報機器の効果的利用方法」と「プレゼンテーション」についても、「大学紹介」と「ミニコミ誌」は効果的であった。学生たちは、その発表や作品づくりにおいて、情報機器を使いこなせなくてはならず、また、効果的なプレゼンテーションを行う必要があったからである。

以上のように顧みると、課題らしきものは見当たらないが、当科目の誕生以前から課されてきた潜在的かつ、今日の学生や若者に求められるライティングに関するスキルやリテラシーに関する能力の向上に関しては、具体的な「手応え」は得られていない。もちろん、本稿で採り上げた単元以外にライティングに関する授業（文章の要約・意見文の作成等）も展開したが、いま振り返ってきた単元で得られてきた効果はデータにしる、実感にしる、得られなかった。紙面の都合上、この件については、別の機会の検証に任せなければならないが、文章を書く力の育成に関しては、これまで実施してきた「日本語コミュニケーション演習」では、不十分である。したがって、今後の展望としては、ライティング面以外での当授業の長所を生かしつつ、ライティングに関する能力の育成に効果的な内容づくりを検討する必要がある。

実際、3年目の当授業においては、語彙・読解の習得というライティングの基礎となる内容に従来以上に時間を割いている。そのため、必修であることと合計単位数に変わりはないものの、従来の二期制からクォーター制に変更するなどの模索が続いている。「日本語コミュニケーション演習」は、まだ確立されていない。これからも変貌を遂げる可能性は小さくない。ただ、それは、学生の実態を顧みながら柔軟に対処し、より効果的な授業へと「進化」を遂げる余地が十分あるということでもある。

『日本語コミュニケーション演習』の特徴で述べたが、当科目では、適切な「ハードル」の高さが意識されている。今後は、その「ハードル」の高さ設定と目標達成との調整が最も大きな課題として取り組んでいかなければならないだろう。

### 「日本語コミュニケーション演習」以前

本学では、従来、初年次の授業科目として、どの大学にもある外国語科目、体育系科目、情報系科目の他、「文章表現法演習」、「基礎演習」といった科目を置いてきた。ただし、この中の「文章表現法演習」、「基礎演習」は閉講となった。

「文章表現法演習」は、文章を書くための基礎を身に付けることを目的とした授業科目で、元高等学校の国語教師や、元新聞記者などが非常勤で講師を務めるといったものであった。非常勤講師が退任した後は、常勤講師が後を引き継ぎ、目的は同じくして行った。授業では、新聞記事や小論文などの要約や感想文、課題についての作文などに取り組み、その都度講師が添削指導をした。これはまた、講義レポートや卒業論文、就職試験の小論文や教員採用試験の論作文などに備えるための対策となっていた。

また、「基礎演習」は、基礎学力の向上及び所謂社会人基礎力を付けるための授業として発足し、本学専任教員の他、非常勤講師として元高等学校教諭、元新聞記者、元社員が務めるなど、バラエティーに富んだメンバーで行われていた。このメンバーの内、元高等学校教諭は管理職経験者がほとんどで、グループ活動の管理・統括のエキスパートであった。

この授業が非常に特徴的なのは、一クラスの学生数 10 名程度(多い時で 15 名程度、少ない時で 5 名程度)という少人数での授業である。特に「基礎演習」は、高校から大学への移行をスムーズにすることも一つの目的としていたため、授業の一環として一泊二日の合宿を行っていた。合宿中には、グループで研修ゲームを行ったり、ディスカッションをして、その結果をまとめたものを発表したりした。この授業では、その他にも漢字検定(後に日本語検定)や数学検定(後に取りやめ)の受検、クラスメンバーの前で自己紹介、自分の興味のあることを調べて来て発表、作文、将来の夢についての調査レポートといった幅広い内容に取り組んだ。この授業を通して、基礎学力や文章作成能力、コミュニケーション力などを含め、社会人基礎力の向上を目指した。ただし、この科目は「人間環境学科(後に「人間環境情報学科」に名称変更)新設の際に、当該学科の学生の必修科目として誕生したものであり、当該学科の募集停止に伴い閉講となった。

本学の現カリキュラムは、平成 24 年から行われた「新教育課程等検討委員会」において、従来の授業科目の見直しを行った結果、様々な授業科目が統廃合または閉講、新設され、組織されたものである。現在の「日本語コミュニケーション演習」という授業科目は、上記の「文章表現法演習」の流れをくむ

ものではあるが、「新教育課程等検討委員会」における担当教員の見直しを機に、科目内容の見直しも要請され、前述の「文章表現研究会」が発足することとなった。その「文章表現研究会」の名の下に度重なる協議を行った末、誕生したのが「日本語コミュニケーション演習」である。

これは、文章を書くための基礎を身に付ける、グループでの共同作業を行うなど、上記「文章表現法演習」、「基礎演習」二つの授業をより良い形に統廃合した科目となった。

また、現カリキュラムでは、「未来デザイン講座」と称する科目群があるが、これらは全て必修科目である。「日本語コミュニケーション演習」はこの科目群の中に含まれる。この「未来デザイン講座」は、1 年次から現在の自分より少し高いレベルに目標を定め、未来に向けて希望をもって一歩踏み出すことをねらいとしている。グループワークやフィールドワークを中心に学生が主体的に学ぶ体験型学習として、アクティブ・ラーニングを取り入れている。この科目群の中には、入学前に開講されるものもある。これらの科目を受講することで、自分の中にすでに蓄えられている力や可能性に気づき、これから身につけるべき知識や技術を自覚し、学びの世界を探索するのに必要な自らの「こころとからだ」と「ことば」を磨く。その「ことば」を磨くために大きなカギを握る科目こそ「日本語コミュニケーション演習」である。

(阪 美里)

### 「日本語コミュニケーション演習」の意義と課題

さて、以上のような経緯で開始した「日本語コミュニケーション演習」であるが、これを一地方大学の取り組みとして終わらせるべきではない。そこでここでは、「日本語コミュニケーション演習」の実践が、わが国における高等教育、とりわけ大学における初年次教育の今後の発展にどのような意義を持ちうるかを考察したい。

そもそも初年次段階における文章表現系の授業は、近年の大学生(母語話者)の多様化や、いわゆる「日本語能力」の低下という状況下において、その重要性に対する認識は益々高まっている。それにとともに、先にも触れたように、初年次教育段階での「文章表現」や「日本語表現」などの文章表現系科目がわが国の大学全体に拡大しているが、これは大学生の文章表現能力に対する社会的な要請の高まりの結果とみなすこともできる。

このような日本語表現関連科目の拡大の中で、その担い手となる教員の配置や教育方法の選択が大き

な課題となっている。この分野を専門領域とする教員は依然として少ないにもかかわらず、必修や選択必修の形で科目が広がると同時に複数のクラスの開講が求められるようになってきている。そうなると、この科目の担い手は専門を問わずに学部に所属する教員の有志をつのるか、持ち回りで義務的に担当するといった形で集められることが多い。または、国語教育や留学生の日本語教育などの「近接」とみなされやすい分野の教員に、担当要請がくることも少なくないようである。結果的に、この文章表現系科目の授業運営においては、専門の異なる複数の教員が集まって担当するケースが多くなる。そのため、授業の設計や運営において教員間の意志疎通の困難さがたびたび報告されてもいる。また、新たに担当することになった教員の多くは、自分の専門分野ではないので、どのような教育方法を選択すればよいかよくわからず、独自に学習目標を設定し、実践の中で試行錯誤するという状況に直面してしまうのが現状である。

ただし、こうした現状の中でも日本語表現系科目の実践報告の蓄積自体は少しずつ進んでいる。その内容を見ると、①専門分野での論文作成の支援、②専門分野の講義理解と分野特有語彙の理解の支援、③専門での学習の基礎を支える論理的思考力・表現能力と学習技術の育成に大別できる。こうした技術は、高度な「学士力」育成に不可欠な要素となることは言うまでもない。なお、これらを個別にではなく総合的に達成するための実践を確立しようとしている研究者の一人として、東京海洋大学の大島弥生に注目することができる<sup>8)</sup>。

しかし、現在の「大学全入時代」において日本語表現系科目に対するニーズは、専門分野の学習に直接繋がるような水準に留まらなくなっているのも現状である。本来は中等教育機関において獲得しておくべきであったはずの基礎的な日本語能力の不足を補うため、補習教育の目的で当該関連科目が設置されるケースも増加している。しかし、そうした補習を目的とした授業を設置しようとする、逆に大学教育の質の低下が懸念されてしまうのも事実である。

さらに、上記のような課題を抱えた大学では、不本意入学の、あるいは進学に対する意図を持たないまま何となくの流れで入学してきた「学習意欲」の低い学生が多く存在している。このような学生に対し、補習という高校までの授業を連想させる授業形態では、彼ら／彼女らの意欲を掻き立てるものには成りえない。なぜならば、彼ら／彼女らは、自らが「大学生」であるという認識は持っているものであり、これからの新しい学びに対する期待感を、これまで

の学びへの嫌悪感と表裏一体的に抱いているからである。したがって、義務教育段階や高等学校において成功した教育方法であっても、大学生に対してでは必ずしもうまくいかないという難しさもある。

このように、過去の失敗の積み重ねによって深めてきた「学習性無力感<sup>9)</sup>」に捉われ、自信を生み出すために不可欠な自己肯定感が衰えてしまっており、それでいて「大学生」としての自己認識は持っているこれらの学生に対し、いかに文章表現系の授業をなしうるか、というきわめて困難な課題をクリアしなければならないことになる。しかし、こうした課題を解決しようとした研究はごく僅かであるのが現状である。

ここに愛知みずほ大学における「日本語コミュニケーション演習」の初年次教育領域における意義がある。すなわち、本論で具体的に示してきたように「学習性無力感」からの解放と同時に、自己肯定感の醸成を促し、“折れない心”と同義の「レジリエンス<sup>10)</sup>」を育成しつつ、文章表現能力の基礎を身につけさせる教育方法の土台を構き、その効果と意義を一定程度明らかにすることができたからである。文章表現系科目の領域において、本授業によってこうした新しい方向性を示すことが出来た意味は大きいであろう。さらにこの方向で研究を深めていくことで、大学全入時代における高等教育の質の保障に、より一層資することになるものと考えられる。

なお、今後さらに追及していくべき課題としては、これらの教育方法の効果を数量分析などによって可視化することで、取り組みの妥当性を判断し、より良く改善していくための具体的な指標を提示することや、これらの取り組みを通じて生み出した教育の成果をどのように専門教育へと発展的に繋げていくかという、科目間接続の問題などが考えられよう。

(久保田 英助)

## おわりに

本稿を結ぶにあたり、「日本語コミュニケーション演習」を受講した学生からの評価を紹介する。実施した2年間の各期末に総合の「振り返り」にて授業内容と自らの授業に対する取り組みに関しての感想を書いてもらっている。また、教務も開講全科目について授業アンケートを実施している。前者は、記述方式で、教員が読むことを前提としているが、後者はマークセンス方式で、担当教員は処理を担当しない。そのため、後者の結果が、客観性をもって当科目の評価を表すが、前者についても、その抜粋を示しておく。学生のコメントを、そのままの形で示すことにより、彼らの生の「声」(実感)として届け

ることができるからである。それらの学生の評価を参考にしつつ、今後、「日本語コミュニケーション演習」および本学の初年次教育について、その充実化を図っていかねばならないが、その本質は、本学だけの「課題」ではない。久保田が述べたとおり、日本の大学全体の課題である。また、さらに高大接続の観点から高等学校をも巻き込んだ議論が必要であろう。

なお、アンケートに関しては、本来なら、実施した授業すべてに関する2年間前後期の計4回3クラス分の結果を紹介すべきだが、データ処理に関する時間不足等の事情により、開講初年度前後期末に行われた極内分の結果を示すにとどめる。それゆえ分析すべき科学的データとしての意味合いよりも、あくまでも当科目の実像を垣間見るための参考として参照されたい。

#### アンケート結果

対象 平成25年度極内担当クラス分

受講者数 前期：51名 後期51名

調査票提出者 前期：46名 後期：36名

実施日 前期：平成25年7月下旬

後期：平成26年1月下旬

形式：無記名 5段階評価マークセンス方式

5：非常に思う

4：（そう思う）<sup>※11</sup>

3：どちらともいえない

2：（あまり思わない）<sup>※12</sup>

1：全く思わない

表示：平均値

#### [授業内容]

①「授業は全体としてよくまとまっていましたか」  
前期：3.8 後期：4.2

②「授業はわかりやすかったですか」  
前期：4.0 後期：4.3

③「授業はあなたの興味をひきましたか」  
前期：3.8 後期：3.9

④「授業内容は将来役に立つと思いますか」  
前期：3.8 後期：4.2

#### [授業方法]

⑤「教員の話し方は明瞭でしたか」  
前期：4.1 後期：4.4

⑥「授業に集中できる雰囲気が保たれていたと思いますか」  
前期：3.6 後期：4.1

#### [教員姿勢]

⑦「教員は周到な準備をし、熱意をもって授業をましたか」

前期：4.2 後期：4.6

⑧「この授業は他の人にも勧めたいと思いますか」  
前期：3.8 後期：4.1

#### [学生受講態度]

⑨「あなたはこの科目を真剣に学びましたか」  
前期：4.0 後期：4.0

⑩「受講態度はよかったですか」  
前期：3.9 後期：3.9

⑪「積極的に取り組んだと思いますか」  
前期：3.9 後期：3.9

#### [授業全体の満足度]

⑫「受講生として、この授業全体の総合評価を5段階でしてください」  
前期：4.0 後期：4.2

#### 「振り返り」（総合）の学生の感想

[コミュニケーション・グループワーク] <sup>※13</sup>

・コミュニケーションには、双方の思いやりが必要と感じた。

・グループワークに抵抗があったが、終わってみると、個人学習では得られない多くのことが学べた。

・初対面の人とのグループワークは不安だったが、意外と円滑に行われ、グループ内で友人もできた。

・受け身では進まないで、自ら積極的に取り組む必要性を感じた。

・休みがちで班のメンバーに迷惑をかけて申し訳なかった。

・いい加減に取り組むメンバーが出てきて不快な思いをした。

・仲間との好ましい関係を作るには積極的に話しかけることと、相手の話にきちんと耳を傾けることが大切だと思った。

・グループでの活動が多かったので楽しく取り組めた。

・コミュニケーションをとることやグループワークは得意ではなかったけれど、回数を重ねるうちに少しずつ楽しいと思えるようになった。

・出席率を考えてグループを作ってほしい。

・他人任せでは進まないで、自主性が培われた。

#### [ICT・プレゼンテーション]

・パワーポイントのスライドづくりを通して、どのようにすれば印象に残るプレゼンができるかを学ぶことができた。

・他グループの発表を見て、プレゼンの方法など、参考になる部分が多々あり、有意義だった。

・グループのメンバーそれぞれが、一人も欠けずに

やる気を持って自分の役割を一生懸命やらないと作品ができないことを痛感した。

・発表時に、うまく進められず、発表の練習をすることも大事なことだと分かった。

[言葉（日本語）]

・普段何気なく使っている言葉の意味を間違えて捉えていることを認識し、改めて言葉の難しさを感じた。

・発表の準備のために、様々な調べ物をするのに苦労したが、文献によっては違ったことが書かれていたりして、自分の独自の見解も入れる必要があると思った。

・日本語の難しさと奥の深さを実感できた。

※1 「高等教育の現場で」（※3・4）参照

※2 総務省情報通信政策研究所「高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査<速報>」平成26年5月

※3 国立教育政策研究所高等教育研究部「大学生の学習状況に関する調査について（概要）」平成26年4月

※4 文部科学省「大学における教育内容の改革状況について」平成24年

※5 高等教育シンポジウム2014 「学力像の転換と大学入試改革—新しい高大接続のあり方を考える—」平成26年9月20日

※6 キャシー・デビッドソン（現ニューヨーク市立大学大学院センター教授）による「2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう」（2011年8月ニューヨークタイムズ紙のインタビュー記事での指摘）

※7 ガー・レイノルズ氏の提唱する「シンプルプレゼン」については、初年次教育学会第7回大会記念講演（平成26年9月4日・帝塚山大学生東生駒キャンパス）にて直接拝聴する機会を得た。

※8 数多い関連著作があるなかで、現時点での最新のものを一つ挙げると、成田秀夫、大島弥生、中村博幸編『大学生の日本語リテラシーをいかに高めるか—大学の授業をデザインする—』（ひつじ書房、平成27年）がある。

※9 抵抗や回避が困難なストレスにさらされ続けると、そうした状況下から逃れようとする自発的な行動すら起こらなくなる現象。C.ピーターソン、S.F.マイヤー、M.E.P.セリグマン著『学習性無力感—パーソナル・コントロールの時代をひらく理論』（二瓶社、平成12年）を参照のこと。

※10 近年、学校だけではなく企業などでも注目さ

れるようになってきた「能力」を表す用語であり、強いストレスや逆境下においてもそれを克服、むしろ適応していく力などの意味で使われている。マーティン・セリグマン『ポジティブ心理学の挑戦』（ディスカヴァー・トゥエンティワン 平成26年）等を参照のこと。

※11・12 実際に実施したアンケート用紙には「そう思う」「あまり思わない」の表記はないため括弧を用いて表示した。

※13 これらの項目は便宜上設けたものであり、実際の「振り返り」には設けていない項目である。

#### 参考文献

ガー・レイノルズ著『シンプルプレゼン』（日経ビジネスアソシエ 平成23年）

成田秀夫、大島弥生、中村博幸編『大学生の日本語リテラシーをいかに高めるか—大学の授業をデザインする—』（ひつじ書房、平成27年）

C.ピーターソン、S.F.マイヤー、M.E.P.セリグマン著『学習性無力感—パーソナル・コントロールの時代をひらく理論』（二瓶社 平成12年）

マーティン・セリグマン著『ポジティブ心理学の挑戦』（ディスカヴァー・トゥエンティワン 平成26年）